

平成29年度

地球環境「自然学」講座

第 7 回

テーマ

「鹿野に暮らし鳥取の海を生かす」

講師

鳥取県漁業協同組合 本所 魚政指導課

福部支所長

古田 晋平 先生

平成29年7月8日

認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

古田 晋平（ふるた しんぺい）



1954 年：鳥取市に生まれる

1978 年：東海大学海洋学部卒

同年鳥取県庁農林水産部水産課勤務

1981 年：新設の鳥取県栽培漁業センターの研究員として赴任

ヒラメ、アワビ、サザエ、バイなどの放流技術を主体に研究

1998 年：ヒラメ栽培漁業の研究で京都大学農学博士授与

2002 年：栽培漁業センター所長就任

2015 年：鳥取県庁を退職し鳥取県漁協本所指導部に勤務

未利用海藻を使った「海の葉っぱビジネス」「新海女の里づくり」
など、漁村振興に奔走中。

鹿野に暮らし鳥取の海に生きる(講演要旨)

生き残りをかけた小さな漁村の挑戦

鳥取県漁業協同組合 古田 晋 平

1. 私が暮らす町「鹿野」とは？

演題にもなっている「鹿野」は私の暮らす町であり、住民だけでなく、なぜか訪れた人を引きつける、不思議な魅力を持った田舎の小さな城下町です。実は私は、25年ほど前に、鳥取市内からここ鹿野の旧地区に移り住んだのですが、若者の流出が耐えなかった当時は、町役場の職員からも「何がよくてこんな不便な田舎町に？」と不思議がられていました。それから僅か5年ほどで町の周辺には団地造成が始まり、鳥取市内を主体に多くの家族が入居し始め、観光客がやってきては町並みを散策する光景が定着してきました。



さて、J Rも国道も通わぬこの田舎町のどこにそんな魅力が潜んでいるのでしょうか
10月の自然観察会では、たっぷりと探索して、それぞれの発見をお楽しみ下さい。

2. 鳥取の海に生きる(まずは私の自己紹介)

鹿野に暮らし始めた頃の私の仕事は、鳥取県の栽培漁業センターの研究員でした。昭和56年に県中部に開設された同センターの最初の研究員として、鳥取県の海への栽培漁業の導入に腐心していた頃です。鳥取砂丘を代表する砂浜海岸が多い鳥取県が、まず挑んだ栽培漁業対象種は「ヒラメ」でした。水槽で育てたヒラメの稚魚を複雑な生態系が渦巻く自然の海に放流して漁業生産にまでつなげようという訳ですから、無謀とも言える企画です。放流したヒラメ稚魚は、「いつ、どこで、なぜいなくなり、そしてどうすれば生き残れるのか？」海底での追跡と水槽実験を重ねることで、小さなヒラメに仕込まれた、サバイバルな戦略が垣間見えたような気がしました。そんなブラックボックスだらけの海の生態系を相手に戦っていた頃に出会った田中 克先生から多くの示唆をいただき、温室育ちのヒラメも漁港市場の常連になってきたのでした。

ところで、鳥取県の栽培漁業対象種はヒラメだけではありません。アワビやサザエ、バイなどの貝類も実用化に向けて試行錯誤が続けられてきました。何れも小さな巻き貝ではありますが、これがどうして、ヒラメにも負けないくらい「強情なほどのこだわり(行動生態)」を持った生き物達でした。今では、何れの対象種も実用化(有償放流)にこぎ着けてはいますが、小さな生き物のそんな「こだわり」を読み解くことが、食う食われるのサバイバルな海で栽培漁業の成果を得る秘訣だと確信しています。

さて、長年、栽培漁業にかけてきた私の現在の仕事は、鳥取県漁協の漁政指導員です。県を退職した私に与えられたミッションは「漁師がもうけて漁協が潤う仕組みづくり」でした。鳥取県の海に生きる漁師さん達との取り組み事例を以下にご紹介します。

3. 未利用海藻アカモクで赤字漁村を黒字化に

まず、セカンドミッションとして託された課題に「経営が赤字となった支所の黒字化」がありました。この支所は、中国地方最高峰の大山(1,722m)の裾野に広がる岩礁(転石)

海岸を主漁場とする県下でも最も豊かな磯場に恵まれてはいるのですが、潜水を主体とする漁業は厳しく、漁業者の高齢化や後継者不足で水揚げは減少傾向にありました。冷蔵庫など漁港施設の管理や漁獲物の出荷経費は、全て水揚金額の一部で賄われていますので、水揚げの減少は生産機能の低下に直結する切実な問題なのです。

そこで、目を付けたのが、漁場に広がる豊かな「藻場」でした。中でも、近年、フコイダンなどの健康機能成分の豊富さから全国的にも注目を集め始めた「アカモク」は、県下でも最も豊富で、これまで地元の漁師さん達にも、邪魔にこそされ、食用や販売の対象とされていない、いわゆる「未利用海藻」でした。組合員の自宅にあった小さな加工場での試行錯誤の末、販売可能な加工商品を作り上げ、県内を主体に販路開拓を続けています。

試行を開始した平成 27 年度には約 700kg だった収穫は、翌 28 年度には約 3 トン、今年度は 6 トンと増加し、空前のアカモクブームにも乗って、漁師さんの新しい収入源の創出とともに、支所の経営も安定した黒字化を回復しつつあります。



アカモク新商品の対面販売

3. 鳥取に海女漁の復活を

もう一つ、私に託されたセカンドミッションの事例をご紹介します。

鳥取県の海岸線の中程に位置する「夏泊」は、県内では唯一、古くから海女漁が盛んな漁村でした。実は、私の暮らす鹿野に安土桃山時代に居城した戦国大名の亀井茲矩(かめいこれのり)が豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に水軍の水先案内人として徴用した筑前大島(現在の博多湾)の漁夫の功績を称えて与えた漁場と家が「夏泊海女」の



海女 1 号の研修(出航前)

起源とされています。その漁夫、助右衛門の妻が素潜漁の名人で、その技がこの漁村に受け継がれたとのことですから、その歴史は 400 年以上にもなります。ひと頃は 30 人近くもいた海女さん達ですが、ここでも高齢化が進み、ついに数年前に解散してしまいました。

ところが、鳥取県知事が全国海女振興協議会で「鳥取県も海女振興する」との宣言をしてしまい、鳥取県漁協にも積極的な対応を求めてきたのでした。さっそく、HP に「海女募集」をアップしたのは良いのですが、はたして、夢と希望に胸を膨らませて応募してきた女性を受け入れる漁村は、夏泊も含めてなかったのです。

そもそも「海女」とは、単に「潜水漁業をする女性」ではなく、船頭や漁獲物の荷揚げ、加工を担う家族達からなる「生産ユニット」だったので、たった一人でやってこられても、漁村の方々が戸惑うのは当然です。

そこで相談を受けた私が推薦したのは、夏泊からはるか 30km も離れた鳥取砂丘の東端にある小さな漁村「岩戸」でした。ここは海女がいたこともなければ、素潜漁の現役漁師さんもおらず、しかも県下の漁村でも最も高齢化が進んだ、いわゆる「限界漁村」

です。しかし、近年、鳥取砂丘の海岸を守るための長大なコンクリート構造物「人工リーフ」が海面下に設置され、そこに芽生えた豊かな磯場資源が未利用だったこと、そして何より、経験豊富で優しいお爺さん漁師達がそろっていたことに可能性を見出したからです。

平成 27 年度に 1 人の女性の研修を開始。さらに 28 年度には彼女を師匠にもう一人の女性の研修を受け入れました。彼女らの収入源は素潜で獲れるイワガキやサザエ、ワカメなどですが、それだけでは到底生活はできません。特に海の時化る冬には漁に出ることすらできません。そこで、冬に冬眠状態となる漁港内を活用したワカメ養殖を開始。さらにこのワカメを夏泊の伝統製法で加工した「絞りワカメ」の生産や、したたかに「海女ブランド」を活かした販路開拓も始めました。そもそも、全国的にも素潜漁だけで生活できる海女さんは皆無に近いと思われます。海女とは、もともと、漁村の主婦の副業なのです。しかし、岩戸漁村に芽生えた若い海女さん達は、これを生活の糧にと考えているため、定着のためには、さらなる収入源が求められます。それぞれが自らの漁船を操り、素潜漁に止まらず、バイ簗漁やコウイカ簗、一本釣など、多様な漁業と独自の販路を持つ「超海女」を目指して、ただ今奮闘中です。

4. おわりに

鳥取県や漁協では、漁業後継者の育成のために手厚い支援を続けています。しかし、それでも沿岸漁業者の減少は止まるところを知りません。「漁師では食っていけん」「魚がおらんようになった」といった「諦め」が漁村を覆っているからです。しかし、そんな中でも、息子を後継者に、数千万円の年収を生み出しているスーパー漁師だっています。また、変わりつつある海の環境に応じて減る魚もいれば、増えつつある魚や未利用の水産資源だって、まだまだあるのです。栽培漁業で培った鳥取の海での技と漁師さん達との信頼関係を頼りに、鹿野に暮らしながら、今しばらくは、鳥取の海に生きる人々に寄り添う日々が続きそうです。